

## 2015 県展 講評

### 1 絵画部門

#### 【総評】

日本画 / 洋画の区分のみならずバラエティーに富む様々な技法、素材の作品が出品されており、興味深い作品が多く、絵の豊かさを改めて感じた。全体として力作が多く選考は難しかった。「見ていて面白いと思ったもの」を入選の基準とした。技術的には高いが既視感のあるものは除くこととなった。

#### 【県展大賞、部門大賞・知事賞】《集束 - binn to rousoku》

大きな画面に単純なモチーフをうまく構成しているところが印象的である。多くのモチーフを描き込むのではなく、いろいろな要素を排除して整理して描こうとする視点が新鮮だ。作家が感じたことがストレートに表現できている。色数を抑え、小さい幅の階調（グラデーション）で描いているところに強さを感じさせ、静かに観る者に訴えかける力をもった作品。

#### 【兵庫県立美術館賞】《朱い糸》

オーソドックスなとらえ方ではあるが、「家族」という対象のとらえ方が上手くいっている。日本画の素材を使いながら、それに溺れることなく量感や質感がよく表現されている。金箔も使われているが主張しすぎず画面の邪魔になっていない。人物それぞれの表情が繊細によく描かれており、何かを語りかけてくるようだ。

#### 【神戸新聞社賞】《萌え》

岩の質感を絵具のマチエールにおきかえ、抽象画のような印象も与える作品。風景画だが質感そのものを抽象的に構成しようとしており、作者の思いを絵具の厚さに込めたような感じがある。独特の空気感も印象的。離れてみると中間色の階調（トーン）の美しさが見え、近づいて見ると絵具の塗り重ねの中に様々な色合いが見えてきて見入ってしまう作品。

#### 【芸術文化協会賞】《樹のある風景》

一種の「気持ちの悪さ」があり、それが強烈な印象を残す作品。右に寄った木や、人体を思わせる木肌の有機的な表現、シュールレアリスムを思わせる地平線の表現など様々なものを想起させる。一度見たら忘れられない印象があり、周囲の空間と調和しない、違和感のようなものがあり独創的だ。じっくりみるといろいろなものが見えてくる作品。

#### 【伊藤文化財団賞】《記憶色》

「白」の強さが画面全体の強さをもたらしている。水彩画の要素を上手いかし、画面の上で絵具を滲ませたり、重ねたりする巧みな配色が涼しげで軽やかな印象を与えている。余白が美しく、そこから光があふれているような感じも受ける。公募展ではインパクトのある作品が多く出品される中、抜け感があり若い感性が感じられる作品。

## 2 彫刻・立体部門

### 【総評】

オーソドックスな具象彫刻からフィギュアやスクラップによる表現まで、多様な傾向の作品があり面白い。若い人の応募が少ないのが残念である。現在では彫刻という言葉からイメージされるものがかなり狭くなっており、いっそのことジャンル名を再考しても良いのかもしれないが、彫刻というものを広くとらえて応募されることを期待する。

### 【部門大賞・知事賞】 《エゼキエルの幻視》

流木や竹など、自然の素材の性質をうまく生かし、軽やかな空間を感じさせる作品。台も、単に支えとしての重みのある台座ではなく、うまく軽やかな造形の一部に溶け込んでいて良い。色彩は、もう少し大胆に使っても良かったかもしれない。

### 【兵庫県立美術館賞】 《剽軽玉子》

オーソドックスな肖像だが、力のこもった良い作品。量感がしっかりと表現されており、素直に好感が持てる。タイトルは、作者の思いが込められているのだろうが、第三者には少しわかりづらく、より作品のイメージに結びつきやすいものであれば良かったのでは。

### 【神戸新聞社賞】 《プラットホーム今昔》

フィギュアとジオラマを組み合わせた作品。25年という時間の流れを見せるというアイデアが良い。紙袋など細部まで丹念に作りこまれている。ベンチの看板の変え方は、同じ場所であるという全体の設定を少々わかりづらくしてしまったのではないか。

### 【兵庫県芸術文化協会賞】 《油塗れし物》

工作機械により金属を研磨した表面の処理が面白い。難しい加工だが、なめらかな曲面をうまく出している。小さいが、無垢の素材ならではの存在感を感じさせる作品。もう少しシャープさがあればさらに良かった。台座には一考の余地があるのでは。

### 【伊藤文化財団賞】《『静かなヒステリック』》

彫刻・立体部門の全出品数 14 点中、40 歳未満の作品点数は 2 点。

スクラップの組み合わせによる表現自体は 20 世紀に遡るものだが、自分なりに堅固な空間をうまく作り出している。造形する力を感じさせる作品。ただ、やや既視感もあることは否めない。歴史的な言語を踏まえつつ、より大胆に新しい解釈で、次の一步を踏み出すことを期待する。

### 3 工芸部門

#### 【総評】

昨年と比較すると応募数は同じながら、特に陶芸などの造形的な作品の質がぐんと上がった印象がある。入選しなかった作品の中にも、良いものがたくさんあった。若い人の応募が少ないので、もっと多くの方に出品してもらえると良い。

#### 【部門大賞・知事賞】《風韻》

主題と作者の感性と素材感がぴったりはまっている。染めを何度も重ねる丁寧な仕事が見れている。工芸の制作には制約も多いが、それを逆に生かすことができている。欲を言えば画面構成が単純なので、やぶの形をしたり、全体にメリハリをつけたりしてほしい。もっと大きな作品も見たい。

#### 【兵庫県立美術館賞】《乾漆 大盛器》

乾漆の作品は珍しく、技法の良さが出ている。感性は若々しいが、形が少し甘いので、もっと造形的に精度を高めてほしい。塗りの仕上げについても、内と外で素材に由来する表情が異なることをさらにアピールできたら良かった。素材の豊かさや造形の厳しさを考えて、細かな質感やメリハリ感を追求してほしい。

#### 【神戸新聞社賞】《象嵌八面花器》

しっかりとした技術力と造形によって作られた手堅い作品。細い線によるデザインも手間がかかるが、綺麗に仕上げられてあって好感が持てる。シンプルな工芸作品を仕上げるのは意外と難しいが、この作品はそれができている。

#### 【芸術文化協会賞】《今宵もいかが（パーティ用ワゴン）》

自分の生活に取り入れようと、楽しんで作った感じがよく伝わってくる。組木の作品は珍しく、また、素材を生かした必然性のある装飾に好感が持てる。手間や時間がかかったこともよく伝わってくる。

#### 【伊藤文化財団賞】《いぶく》

従来に無い発想が面白い。シンプルな形ながら主題と素材が結びついていて、よけいなことをしていないのが良い。

## 4 書部門

### 【総評】

例年と比べて全体的な水準は高い。また漢字、かな、前衛、篆刻とそれぞれのジャンルが出品されていて非常にバランスが取れている。その中で、各作品の良いところを幅広く引き出せるように、また所属団体によってあらわれてくる傾向などへの偏りが出ないように作品を選んだ。

### 【部門大賞・知事賞】《章土雅詩》

漢字。行書と草書が織り交ぜられており、縦と横の筆跡の動きが良い。行間の絡み具合が絶妙。また字の大きさに適宜変化がつけられ、作者が非常によく書き込みをしていることがわかる作品。

### 【兵庫県立美術館賞】《さくらさく》

かな。墨の色、紙の色、表具の色の調和が取れている。平安調のかながベースとなって、落ち着いた中にも雅やかさが感じられ、安定感もある。良い意味で典型的なかな作品で、作者のふだんの熱心な勉強具合が思い起こされる。

### 【神戸新聞社賞】《童》

前衛。上から下への躍動するリズム感が際立ち、その中で余白の地色が美しい。全体的には軽快である一方、気品高くもある。

### 【芸術文化協会賞】《送友人》

漢字。それぞれの字の絡み合いと行間の余白がうまく活かされている。文字の大小のバランスもよく、余白の地色の美しさとあいまって、すがすがしさが感じられる。

### 【伊藤文化財団賞】《恋》

書部門の全出品数 62 点中、40 歳未満の作品点数は 7 点。

漢字かな交じり。線の切れ味がよく、見てて心地が良い。同じような作品の中で、明るくすっきりとしている。墨の線にハリがあり、余白も活きている。

## 5 写真部門

### 【総評】

デジタル加工した作品よりもストレートに撮影した作品に良作が多かったように思われる。日常のふとした瞬間をうまく切り取った作品が多いのは良いが、冒険心に富んだ作品がさらに増えることにも期待したい。なお、プリントサイズや額装など最後の仕上げにもこだわってほしい。

### 【部門大賞・知事賞】《ウォーター パラダイス》

複雑に重なり錯綜する空間の中に置かれた色彩のリズムやモザイクのようにジグザクになった子供のイメージが面白い効果を生んでいる。偶然性を生かした構図に写真を心から楽しむ瑞々しい感性が感じられる。

### 【兵庫県立美術館賞】《老王》

対象そのものをストレートにとらえる写真本来の力を生かした王道的な作品。力強い明暗のコントラストは他の作品にはない濃密な迫力を感じさせる。いつまでも見飽きることがないという意味ではこれが一番である。

### 【神戸新聞社賞】《虎視》

まず何を撮影したものかという興味によって見る者を惹きつける。スタンドグラスの美しい色彩や透明感・物質性をよくとらえている。写真ならではのトリミングの面白さが際立った作品である。

### 【芸術文化協会賞】《出会いのプロローグ》

シルエットを使った作品が散見される中、本作はシルエットを立体的に構成している点が面白い。また、子供のプロフィールが非常に効果的であるが、全体的にもう少し光と影のコントラストをつければなお良かった。

### 【伊藤文化財団賞】《行き交う影》

ほとんどの人が見過ごすような何気ない場面をスナップ的にとらえた作品であるが、瞬間的なフレーミングの取り方にセンスを感じる。一席の作品と同じように、重なり合う空間の表現が面白い。

## 6 デザイン部門

### 【総評】

「デザイン」という切り口で作られた作品が少ないので、例えばコピーライトをどう取り入れるかなど、絵画とデザインの違いなどを考えてほしい。デザインは自己表現ではなく、社会へ向けたものであるが、応募作にはメッセージ性が欠ける傾向にある。また、展示した状態も含めて作品なので、展示方法にももっと注力してほしい。若い人の応募が多いのは良いことだが、もっと大胆でユニークな表現に取り組んでほしい。イラストレーションが多いので、プロダクトデザインやテキスタイルなどの出品が増えると良い。以上のことより、今年度は、1席は該当無しとした。

### 【兵庫県立美術館賞】《孫の音楽隊》

全体的にインパクトがあり、目を引く。口の表現の仕方が大胆で面白く、元気な雰囲気を感じられて良い。

### 【神戸新聞社賞】《マスクの季節》

キャプションが全体に荒々しさを与えていてもったいないので、その見せ方にもぜひ注力してほしい。イラストは若々しくて良いし、また絵の中にメッセージを組み込んでいるのも面白いアイデア。

### 【芸術文化協会賞】《ピリカ BOOK “ここでないもっと遠くへ...” & 文庫カバー》

既視感はあるが、デザインとしてトータルな提案がなされている。デザイン部門の応募作として分かりやすい。

### 【伊藤文化財団賞】《心の Sword》

生命力の感じられる魅力的な作品。点描で丁寧に書かれており、バランスも良い。デザイン分野の視点からいえば、例えばロックミュージックの CD ジャケットなど、社会の中でいかに展開するかの提案があればさらに良い。今後の活躍に期待。